信州大学教育学部 同窓会報

信州大学教育学部同窓会報
【第 7 号】
発行人　新 井 好 仁
事務局　長野市西長野6ノロ
信州大学教育学部
教育実践研究
指導センター内
TEL　(0262)32-8106(代表)

教育の向上と同窓会の役割り

同窓会長　新 井 好 仁

一、はじめに

「同窓会報」第六号にて、本同窓会の結成以来平成三年度までに、果してきたことを記してあります。平成四年度の事業は、学部後援として大学院設置援助を行い、後発の社会科・英語科・家庭科の大学院設置も進み、当初の目的を達成することができました。この推進にあたっての学部の努力に深く感謝するところです。そして、平成五年三月には後発三教科を除き大学院第一期の修了生を送り出すことができました。

さらに、学生海外派遣（二名）の研究助成、会報の発行、卒業生名簿の整理、組織充実等について事業を行ってきました。

二、教育の向上を目指しての同窓会の役割り

三月の卒業謝恩会に呼ばれたときのことです。卒業生の大半が県外出身者であることから、長野県の教師となる数は更に少ないことは否めないことですが、ほぼ全員が本同窓会の会員であります。したがいまして、今後は本会を寄り処として学校現場の教育と学部との連携をもって、教育の向上に励んでいただけることを願わざるを得ません。

謝恩会の席で語った卒業生の中には、出身県の教師となる者、他県出身者であっても長野県の教師となる者がいました。それぞれが目的と期待をもって教師となることに意欲を燃やしている姿に熱いものを感じました。

ある男子卒業生は、教師の道を選ばなかったが気持ちの中には数年社会勉強をしてから、教師になりたいと考えていると言っていました。これも教師としての人間的な成長や教育の質的向上になるならば良い選択となってほしいと感じました。

本同窓会は、こうした若き教師達、現役で励んでいる教師、教育の在り方を常に考えている先輩達の共通の場を設定し、多様化する社会の変化に対応し、21世紀の社会に貢献できる人間の育成を目指しての、教師像・教育観・教育技術等を交換し合い、自らの力量を高めつつ、21世紀に生きる子供たちに、どのようなタネを与えていくかを考え、情報を伝達し互いに研鑽し合う活動母体でありたいと考えます。

そのために、未加入の卒業生の同窓会入会を促進し、組織充実を図り日本の教育の向上のために貢献したいと思います。

平成4年度　学位記授与式にて（県民文化センター）

信州大学大学院 教育学研究科に学んで

大学院でえたもの

学校教育専修　裾花中学校　鈴木　明

四月から新しく中三の担任となり、やりがいのある生活をさせていただいている。

そんな自分が、二年前に比べて変わったところは、どんなところであろうか。

一つ目は、自分自身の認識の変化である。もともと思いこみが強いほうなので、人を言語のみで理解させようとしたり、規範のみに頼ってしつけをしようとしたことが多かったように思う。今でもそうすることは多いが、もう一人の自分がいつでも『これではいけない』と言っているのを感じる。人の認識を変容させるには、なんらかのこだわりの場に立たせねばならないこと、それを教師は常に見出しつづけねばならないことが肝心である。それを信念とできたことは、この二年間の最大の収穫であった。

二つ目は、生活スタイルの確立である。昨年は校務をおえての研究であったため、すべては夜に行うことになったが、結果的にそれは、働きながら学ぶというスタイルの確立となったのである。日常は、目先のことにとらわれがちなのであるが、そうしている自分を見るもう一つの眼をもって生きるようになれた研究科での二年間に感謝している。

研究はようやく緒についたところ

国語教育専修　川中島中学校　栗林正幸

大学院での研修を終えて、早一ヵ月が経つ。二年間の長期研修であったが、今思うと、あっという間に時が過ぎ去っていたようである。特に二年目は現場に身をおいて修士論文を完成させなければならなかったので、いかに時間を生み出し、有効に使うかということに苦慮させられた。

それでも、この二年間、それまで現場においては遅々として進展を見ることがなかった「中学校国語科における文法学習指導」の研究に沈潜でき、多少の成果を得られたことは大きな喜びであった。また大学院の学究的な雰囲気にふれ、学問の奥深さを改めて窺い知ることもできた。

しかし、私の研究は問題の表層をなでまわしただけで、今後には課題が山積している。その課題を思うと、私の研究はようやくその緒についたところという気がするが、幸いなことにこれからの道すじは見えてきている。現場に完全に復帰して、これからどれだけ今までの研究を足がかりに発展できるか不安は尽きないが、一層の精進を誓いたい。

不惑継続

国語教育専修　山王小学校　橋詰辰男

平成三年度より新設された信大大学院教育学研究科の第一期生として、修論で、新学習指導要領の「硬筆と毛筆の関連を図る指導の重視」の方針に着目し、子ども達の自主的な学習への取り組みと、硬毛の関連を図る小字指導の学習過程への取り入れ方などを研究しました。

長野県の明治期の毛筆大字・小字論争を手がかりに、水戸部寅松の文献研究や児童の視覚認識能力・書きやすい文字の大きさについての実験・調査などにくわえて、上條信山の提唱する「書造形の原理」をもとに、基礎・基本をおさえ、自主的に取り組める書写学習や硬筆と毛筆の関連を図るための小字指導を取り入れた書写指導の学習過程試案が考え出せました。（学習過程は略）

大字精習の学習過程の中に小字だけの学習を取り入れていくことや、練習用紙の自作などが、児童の書写力向上には是非とも必要であるとの結論を出すに至りました。

これもみな同窓会の皆様の大学院設置へのご努力の賜物と深く感謝しております。

今後とも『不惑継続』を図りたいと思います。

葦の髄から天をみる

国語教育専修　中野平中学校　本山育人

一年目は、時間的に余裕もありましたが、二年目は週に二十二時間の授業を持ち、一週間に半日だけの大学通いでした。研究の推進についてはかなり時間的な制約もありました。ようやく修了できた今、当時の生活を振り返ると、常に頭のどこかに「論文にまとめなければならない」というような一種の強迫観念がつきまとっていたような気がします。

しかし、考えてみれば、日常生活では次から次へと起こる雑事に追われがちで、自分の生活のバックボーンというものを持ち得なかった私にとっては、自己の生活を見つめ直すということで、大きな転換点を与えたことも事実です。

自分の担当している教科について教育観というものを、初心に返って見つめ直すことができたと感謝しています。視野は狭くても、深く追究することの中に、学問と呼ばれる物が存在していることを痛感しています。今後もこのような態度を持ち続けたいと思っております。

大学院で学んだこと

数学教育専修　小布施中学校　北村　雅

早いもので、大学院での二年間の研修期間が終了しました。一年次は大学院で文献研究や研究テーマ設定のための基礎研究に、二年次は現場にも

どり生徒の実態調査やテーマの追究と修士論文に従事した二年間でした。研究生活というものに初めて触れ、現場での研究との違いや厳しさを思い知り、自分の力のなさを痛感した時期もありましたが、指導教官の暖かい励ましもあり、論文を完成させることができました。

二年間の研修の中で、特に心に残っていることは「討論を通して論理性を培う」ということと「羅列するのではなく、その構造まで考え、順序構造として考えなければならない」ということです。特に指導教官の先生からは、現場では生徒の実態の問題点を羅列するのみで、本当の問題点が順序構造的に浮きぼりにされておらず、そのために研究テーマの追究が甘いということを、事あるごとに指導されました。一つの研究を成立させることのむずかしさ、厳しさを痛感した思いです。

最後になりましたが、今回の貴重な研修の機会を与えて下さった長野県教育委員会をはじめとして、関係の方々、指導をいただいた先生方に心より御礼申し上げます。

大学院研修で得たもの

数学教育専修　長野東部中学校　西澤道生

大学院での二年間の研修が修了し、すでに一カ月余りが過ぎようとしている。二年目は現場にいながら、修論のまとめをするということで、研修時間の確保、理論と実践とのギャップ等、苦しい日々が続いたが、今になって思えば良い思い出である。

さて、こうした大学をはなれ現場にもどり、日々数学の授業に明け暮れしているわけであるが、研修の前と後で、自分自身にどのような違いがあるのかが気にかかるところである。研修で得たものは何だったのかということである。

数学教育に関する専門的な研究にふれ、さらに自分の研究テーマにそって研究した内容はもとよりのことであるが、なによりも今生きているのは、研究の仕方、研究をする姿勢であるように思われる。日々の授業の中で、自分なりの仮説をもちそれを実際の授業で確めていくということに、おもしろさや、数学教師としてのやりがいを感じるようになってきている。

これからさらに、この研修で得たものをより確実なものにしていきたいと念じている。

感謝

音楽教育専修　芋井小学校　片桐美岳

大学院を修了して早くも二ヶ月が過ぎようとしている今、この二年間の多くの出会いに改めて感謝をしています。

教壇から一時降り、とにかく後先も考えずに学ぼうとする側に立っての一年次は、高度な専門性に触れるにつれ今までの拙い経験が裏うちされ、自分の中に確かに位置づいていく実感が得られることの連続でした。〝腑に落ちる〟というのでしょうか。またそれと同時に、現場に戻ってから、「また教壇に立てるのだろうか。」というような不安がどんどん増して行ったのも事実でした。

現在の私はそのような何だかわけのわからない怖さのようなものを感じつつも、音楽科教育のより魅力的な教材発掘というテーマを自らに課し、微力を尽くしています。この場をお借りしてこの二年間にお世話になった先生方、多くの関係の方々に改めて厚く御礼申し上げます。

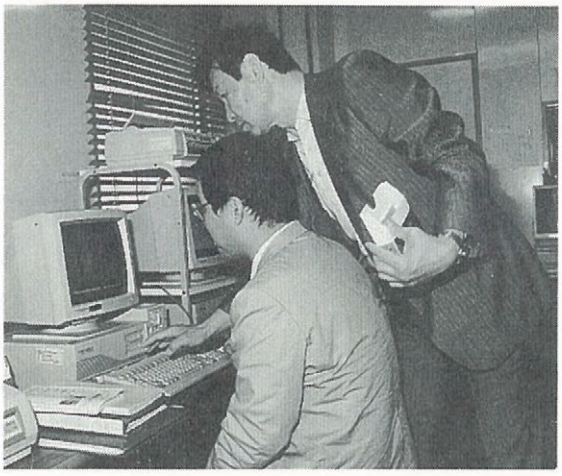
大学院での研修を終えて

保健体育専修　大野川中学校　板花利美

二年間の信州大学大学院教育学研究科の修士課程を、この三月何とか修了することができました。現職教員として、二年目、勤務しながら通学し、修士論文の作成と授業研究の演習を進めることは、自分自身の未熟さや一年次の学習不足からかなり厳しいことではありましたが、充実した日々でもありました。

本学の入学に当たり「これからの自分の教育実践に結び付くものを得たい」ということが第一にありましたが、講義や演習、修士論文の作成の中で多くのことが学べ、また自分にとってのこれからの課題もいくつか見えてきたように思えます。これからは、この二年間の研修で得たものを教育実践に少しでも生かしていきたいと思います。

最後に、このような貴重な研修の機会を与えて下さった県教育委員会並びに関係者の皆様に感謝するとともに、在学中ご指導ご助言をいただいた本学の先生方及びご援助ご協力いただいた勤務校下水内郡豊田中学校の先生方にお礼申し上げたいと思います。



大学院ゼミ風景

第五回　総会報告

信州大学教育学部同窓会第五回総会は、平成四年八月十一日（火）長野市岡田町ホテル信濃路において、五十八名の出席者を得て開催された。

新井好仁会長の挨拶の後、小口明・田島守氏が議長団に選任された。そして、議事録署名人には神田米男・渡辺時夫氏を選任し、和田清・杵淵恭宏氏を書記に任命して議事に入った。議事では、次の二議案が審議された。

第一号議案　平成三年度事業報告書、収入・支出決算書及び財産目録の承認について

松林大幹事長から総会資料に基づいて平成三年度事業について報告があり、全員一致で報告通り承認した。北沢競会計担当幹事から収入・支出決算報告書及び財産目録について説明があり、清水厚実監事からの会計監査報告の後、全員一致でこれを承認した。

第二号議案　平成四年度事業計画書（案）及び収入・支出予算書（案）の承認について

幹事長及び会計担当監事が総会資料に基づいてそれぞれ説明した後、審議し原案通り承認された。

引き続いて名簿刊行事業について、松橋英幸名簿刊行会長から完成までの経過報告がなされた。そして、新井会長から刊行に尽力された松橋刊行会長及び渡辺雄三信教印刷（株）社長に感謝状が贈呈された。

議事並びに表彰に引き続き、北条舒正繊維学部同窓会千曲会理事長と鈴村金弥教育学部長から来賓祝辞をいただき閉会した。

総会終了後、記念講演として長野県豊丘村教育委員長毛涯章平氏によるご講演「忘れ得ぬことども」を拝聴した。

ご講演中の毛涯章平先生

事務局だより

これからの課題とお願い

同窓会幹事長　松林　大

会員のみなさんお元気でご活躍のことと思いますが、如何でしょうか。

同窓会設立後、六年の年月を経過し、充実と発展を遂げて参りました。また、会の運営方法も定着し、一年間の仕事も周期を持って運営することが出来るようになりました。このことについては、これまでの会長、幹事長さん初め、役員の皆さんのご努力によるものであります。これまでにご苦労されて参りました役員の皆さんに、敬意を申し上げるとともに、心からお礼申し上げます。

また、本同窓会設立の契機となり、一つの課題として、「教育学部に大学院の設置を」の願いがありました。この同窓会の強力な支援もあって、家政教育専修の一専修だけを残すことになりました。これも平成六年度、発足の見通しが立つ状況になっております。従って、この件については、初期の目的が達成されたものと考えられます。

ここに、信州大学大学院教育学研究科（修士課程）の完結を目前にして、事務局一同は会員の皆さんのご支援に、心から感謝申し上げます。

さて、この同窓会の設立において、その目的が会則の第三条に「本会は会員相互の親睦を図り、母校との連携を保ち、その発展に寄与することを目的とする。」と示されています。

この目的を達成させることの内容には、まだ幾つかの難しい課題が残されており、それを解決して進まなければ、本会の更なる発展は出来ないと考えられます。

以下、それらの課題を示し、会員の皆さんのご意見を頂きたいと思います。

一　大学院設置に関する問題

信州大学大学院教育学研究科（修士課程）の設置の問題は、既に九割以上の完成を見るに到っていることは前述の通りであり、大学院設置の問題は終結したように思われます。

然し、教育学部教授会内では修士課程の設置後は、直ちに博士課程設置の問題が話題になっております。この博士課程設置の問題は、教育学部の充実発展にかかわる大きな課題であり、近い将来に於いて活動が開始されなければならない問題であります。同窓会も、この問題に無関心でいることは出来ないと思います。

更に、大学院（博士課程）の設置に関連して、教育学部に付属高等学校の設置を進めるべきだとの話題が、学内及び長野県下の教育界に於いて持ち上がっています。

県下の教育界が教育学部に付属高等学校設置を求めている理由には、博士課程設置とは別な視点即ち、長野県の学力向上の効果をねらいにしていると言われています。

何れにしても「母校との連携を保つ」の意味でも、本同窓会は、これらの問題に対応しながら発展していかなければならないと思います。

二　組織充実に関する問題

この問題は本同窓会の目的に直接関係するものであり、二つの観点で処理しなければならない問題であります。

① 本学部新入生の加入率に関する問題

信州大学教育学部に入学する学生は毎年三百二十名から三百四十名位おります。その内の一割程度の学生が、同窓会への未加入者になっています。九割の加入率なら、一般的には高い加入率であると言えるかも知れないが、例え僅かな未加入者であっても、同窓会の目的である「親睦を深める」立場から考えるとき、一名たりとも残していくことは忍び難いものであります。

事務局としては全員加入の方途を検討しておりますが、会員からのご助言とご協力が頂けますようお願い致します。

② 本会設立以前の卒業生の未加入者の問題

同窓会が設立される以前に、この教育学部を卒業された方には、同窓会に加入されていない方が沢山おります。住所の変更などがあり、充分な連絡がとれないままに、今日まで来てしまったことを申し訳なく思っております。

未加入者を出来る限り無くすように、一昨年度より幹事会で論議し、幹事会の中に組織充実の責任者（佐野昌男先生）を置き、支部組織の充実を図るための方途を検討して来ました。支部組織の充実に係る先生方には、大変に厄介な問題に取り組んで頂くことになりますが、よろしくご協力願います。

また、一人でも多くの者が同窓生の仲間入りをして頂き、同窓生としてより深く、親睦が図れますよう、全会員の皆さんにもご協力をお願い致します。

三　同窓会館建設に関する問題

同窓会の目的に示されている、会員の親睦に関する内容を、具体的にどう進めるかの課題があります。その課題の一つとして、同窓会館の建設のことが同窓会設立の時から問題になっていました。その会館には、会員の福祉的な役割を持たせたいとの考え方もあります。

これから、同窓会館建設の検討委員会の中でも、同窓会館の活用にどのような機能を与えたら良いのか等々の問題を論議してゆくことになると思います。会員の皆さん方からもご意見を拝聴し、よりよい会館の建設にしたいと思います。このことについてもよろしくお願い致します。

新任のご挨拶

教育学部の課題と同窓会へのお願い

信州大学教育学部長　小林輝行

この度、鈴村前学部長の後を受け、平成五年四月より学部長を仰せつかった小林でございます。文字通り浅学菲才で適任ではございませんが、同窓会の皆様方のご支援ご協力をいただき、教育学部及び大学院の整備充実に全力を傾注して参る所存であります。何卒宜しくお願い申し上げます。

ご承知のように大学は戦後における第三の危機とも言われ、私どもの大学を取り巻く状況は急激に変化してきており、大学に対する社会の要求もますます多様化し、複雑化、高度化してきております。本学部もこうした社会の変化に主体的に対応し、学部の活性化を図って行くことが必要不可欠な課題であります。

こうした中で、現在私どもの学部が当面している課題について申し上げますと、第一は、教員需要減に対応するための新課程設置問題であり、第二は、大学設置基準の大綱化に伴う教養部の改廃問題であり、第三は、大学院家政教育専修の設置の問題であります。この他にも、国道４０６号線拡幅に伴う南校舎移築問題をはじめ、志賀自然教育研究施設の問題等々多くの難問が山積しておりますが、ここでは、上記の三点について申し上げておきたいと思います。

第一の問題については、本学部は、平成元年度までは教職への就職率が八割以上の高率を保持しておりましたが、平成二年度より教員就職率が低下し始め、平成三年度にはついに五三パーセントと、全国の教員養成大学の平均教員就職率なみにまで急激に低下して参りました。平成四年度の教員就職率は、六十数パーセントとやや回復の兆しをみせておりますが、今後の見通しは決して明るいものではありません。こうした状況に対応するために私どもは、長野県における将来の教員需給状況を踏まえ、その対応策を十分検討して本学部独自の特色ある新課程の設置に向けて鋭意努力しているところであります。

第二の問題については、信州大学全体としては教養部の廃止という方向で進んでおり、いずれそう遠くない時期に全学再編の中で教養部は解体されることになるものと思われます。従って、教養部教官の分属問題が日程にのぼらんとしている状況下において、本学部においても教養部教官の協力の下に教育研究体制を整備再編するため、関係機関を中心に具体的計画の立案検討を進めております。

第三については、お蔭様で今年度これまで未設置であった社会科教育専修及び英語教育専修の二専修が追加設置され、過日これら両専修の入学生を新たに迎えることができました。上記両専修の設置により併せて学生収容定員が七名増加いたしました。これにより本大学院は、二専攻十専修、学生収容定員三四名の大学院となり、完成までもう一歩というところまで参りました。これも一重に同窓会の皆様方の絶大なるご支援の賜であり、深く感謝申し上げておる次第であります。のこる未設置教科は家庭科のみとなりましたが、平成六年度の家政教育専修の追加設置に向けて総力をあげて取り組んでおります。

最後になりましたが、毎年同窓会から本学部大学院設置のために多額のご援助をいただき、まことにありがとうございます。学部を代表して厚く御礼を申し上げます。私どもは、同窓会の皆様方のご意向に沿うよう有効に活用させていただく所存であります。今後ともより一層のご支援ご援助を賜りますよう宜しくお願い申し上げる次第であります。

大学院ゼミ風景

研究助成海外派遣学生便り

中国

特殊教育学科　川口紀子

私は、昨年九月より、文部省の派遣留学制度により奨学金をうけ、中国の北京師範大学で学んでいます。

ここ北京という街は、建並ぶ高層ビルの隣りに歴史的な遺物が佇み、そしてそれが自然に溶合っているという街で、歴史的重みと躍動を続ける現代中国の力（パワー）を同時に感じる街です。

そして、教育にも同じ事が言えます。私は教育学部で主に特殊教育を学んでいますが、中国の伝統的な教育方法の中に新しい方法を取り入れようとする方向で、大変興味深いものです。一般学生と共に受ける講義についてゆくのは大変ですが、担当の教授やまわりの学生がとても友好的で、親切にしてくれ、助けてもらいながら学んでいます。

留学というすばらしい機会を与えて下さった、そして支えて下さっているすべての方々に感謝したいと感じると同時に、自分のベストを尽し、多くの事を学びたいと思っています。

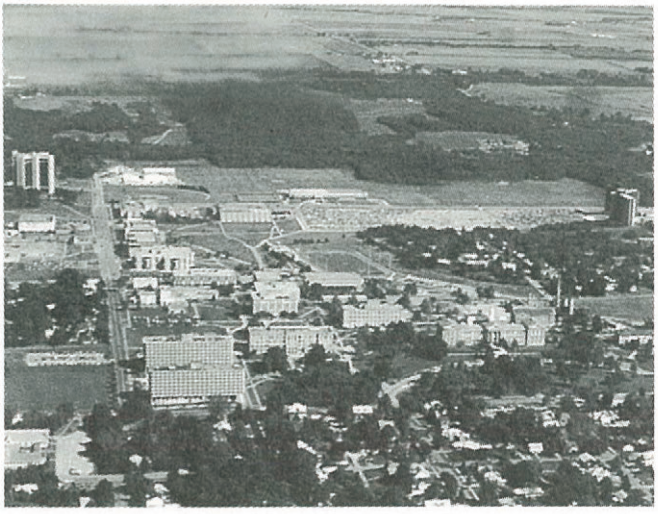
アメリカ

英語科　酒井英樹

この度は信州大学教育学部同窓会海外留学援助を頂き、有難うございました。

アメリカの地を踏んでからもう早いもので半年が過ぎようとしています。イリノイ州マコムにある西イリノイ大学で、バイリンガル・バイカルチュラルを専攻して、英語教育方法などを勉強しています。イリノイ州は全米で五番目にヒスパニック系の人口が多い州であるため、英語教育・文化に起因する学力問題が身近に存在しています。前学期の授業では、アメリカ人の学生と組んでコンガ出身の六歳の少年に英語を教える機会にも恵まれました。

異文化理解・第二言語によるコミュニケーションの困難やつまづきを通じて、言語教育とは何か、文化とは何かを考えさせられる毎日です。将来、この経験を生かせるよう、充実した留学生活を過ごしたいと思います。



平成四年度転退職教官

京極　興一　先生（国語教育）
昭和四十四年四月　信州大学教育学部
平成五年三月　定年により退職

村杉　弘　先生（音楽教育）
昭和三十二年四月　信州大学教育学部
平成五年三月　定年により退職

大場　一義　先生（保健体育）
平成三年四月　信州大学教育学部
平成五年三月　定年により退職

石橋　誠一　先生（技術教育）
昭和六十一年四月　信州大学教育学部
平成五年三月　定年により退職

堀口　健雄　先生（理科教育）
昭和六十三年十二月　信州大学教育学部
平成五年三月　北海道大学へ転出

田上　不二夫　先生（学校教育）
昭和五十三年十月　信州大学教育学部
平成五年三月　筑波大学へ転出

信州大学教育学部同窓会

第六回通常総会（通知）

日　時

平成５年８月11日（水）

午前10時より

会　場

長野市岡田町「ホテル信濃路」

次　第

1、開　会

2、会長挨拶

3、議長団選任

4、議事録署名人の選任並びに書記の任命

5、議事

第一号議案　平成４年度事業報告書、収入・支出決算書及び財産目録の承認について

第二号議案　平成５年度事業計画書（案）及び収入・支出予算書（案）の承認について

第三号議案　役員の改選・任期の確認について

6、来賓祝辞

7、閉　会

総会後、11時20分より記念講演会

記念講演　（一般公開）

「二十一世紀に向けて、信州大学の挑戦」

信州大学事務局長

青木　重（しげる）氏

〈プロフィル〉

昭和十四年一月十三日生まれ

昭和三十二年四月～三十三年三月　信州大学教育学部２類社会科

昭和三十八年三月　東京教育大学文学部卒業

昭和三十八年四月　文部省入省

昭和五十二年八月　総合研究開発機構主任研究員

昭和六十三年六月　奈良女子大学事務局長

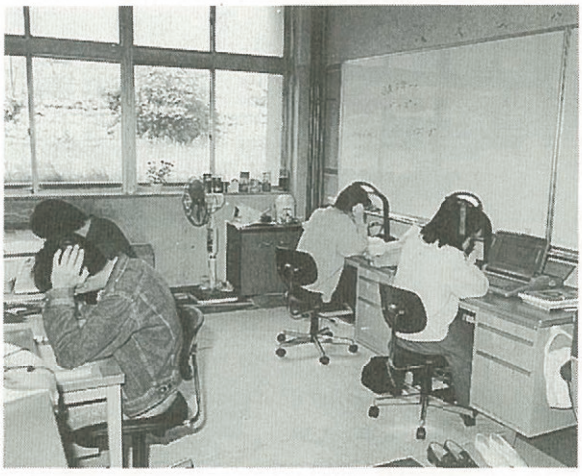
平成元年八月　東京芸術大学事務局長

平成四年四月から現職

記念講演会終了後、「ホテル信濃路」において懇親会（会費五〇〇〇円）を開催します。こちらへも多数ご参加くださいますようご案内申し上げます。

◇編集後記◇

会報を編集しながら会報係の頭にいつもあったことは、会員が同窓会により親しみを感じ、身近な存在に感じるためにも、「会報」にできる限り多くの会員に登場ねがって、各年齢層の卒業生が今どこで、どの様な活躍をされ、またどの様な問題を抱えているかの近況報告等を掲載できないかということでした。それによって同窓会の一つの柱でもある会員相互の親睦を図る機能の一端を会報は果たすことができるのではないかと思ったからです。「今ここに生きている」会員の姿を掲載する方略を模索しているうちに今回の編集はおわってしまいました。その思いが実現できなかったことは心残りですが、皆様からよりよいご示唆がいただければ幸いです。（牧・野口）



大学院生の研究室